

職業奉仕と米山月間に寄せて

国際ロータリー第2660地区 ガバナー
高島 凱夫



職業奉仕については、“このようにしたら世の中に良いことを成した”ということが、なかなか解りにくく、少なくともロータリアンになって日の浅い私では、難しいことを言われると返答に窮することがあります。職業奉仕を含め、ロータリーに関する考え方は、さまざまな考え方があって良いのではないかと常々考えています。ロータリーの綱領、国際ロータリー定款・細則、クラブ細則が湖の堤とすれば、その湖の中で千差万別な意見があっても良いのではないかと、思います。ロータリークラブに所属する以上は、湖の堤を超えることはロータリアンにあってはならないことです。

職業奉仕を考える上では、やはり四つのテストが基本になるのではないのでしょうか。四つのテストは、ハーバート J. テーラーが、窮地にあった彼の会社を救うのに役立ったのです。この指針が表現していた内容や信条はまた、ほかの多くの人たちに対しても、倫理的羅針盤を提供することになりました。やがて、国際ロータリーによって採用され、広く知れ渡ることになったこの四つのテストは、今日では、ロータリーの基本理念の一つとなっています。

中核となる価値観(core value)、即ち奉仕・親睦・多様性・高潔性・リーダーシップも職業奉仕の中に大きな比重を占めていると言えるでしょう。とりわけ、高潔性(integrity)は、職業奉仕の中では決して忘れてはならないWordでないのでしょうか。高潔性=正直さ・誠実=他人を思いやる心(尊重)・責任感と捉えて良いと思います。

なお、中核となる価値観の5つのWordsは、今後「4つのテスト」と同等のロータリーの考え方の一つとなっていく、重要な項目だと思われます。

10月は「米山月間」でもあります。皆様は、充分ご承知のことと思いますが、米山奨学事業は、創設から半世紀

以上の歴史を持つ、日本のロータリー独自の奨学制度であり、事業創設の願いは、外国人留学生の支援を行なう奨学事業を通じて、世界の人々に“平和日本”の理解を促す事でありました。現在も創設時の理念を基に外国人留学生の支援と交流を通じて、国を超えた絆や信頼関係を築き、20年30年後の実りを願い、一人ひとりの胸に世界平和を願う“心”を世界中に植える“植樹”の様な奉仕事業を行なっています。

民間団体が行なう奨学事業としては、奨学生総数、奨学金の総額からみても世界に誇るべき事業規模であり、又、宗教や思想の強要が無い素晴らしい奨学制度であります。

米山奨学事業の目的が「平和と国際理解の推進」を実現する国際親善奉仕活動であることを理解し、活動を通じて交流する奨学生が、生活習慣が異なる異文化で育ってきた外国人留学生であることを充分に承知しておく事が大切であると思います。

しかし、半世紀の時を経て世界情勢や取り巻く環境も変化し、奨学制度のあり方も貧窮救済支援型から知的国際貢献型に変化してきており、この事業の捉え方にも様々な形が生じ、支援する立場の方々の心情も微妙に変化してきていると思います。

ロータリーにも進化が求められる様に奉仕事業も時代の変化に適合する柔軟な姿勢が求められます。この様な時こそ改めて事業創設の原点を再認識する必要がある様に思います。

ロータリアンが忘れてならないのは、奉仕事業の根本は見返りを求めないことではないでしょうか。見返りを求める気持ちは、批判的な気持ちに変貌し、素晴らしい奉仕事業の妨げになってしまうと思います。